

原著論文

初等教育学科「音楽」におけるピアノ指導の現状と課題

The Piano Instruction in the Music Class for Students in Newly Established “Early Childhood Education Major”: Its Current Situations and Issues for Improvements as the Next Step

川口 潤子 (白百合女子大学)

Junko Kawaguchi (Shirayuri University)

本稿は、平成28年4月にスタートした初等教育学科の「音楽」の授業におけるピアノ指導の現状を学生の意識調査により把握・分析し、今後の課題とその対応について明らかにしようとするものである。

まず、平成28年度のピアノ指導の概要として、学習環境と集団指導の方法、具体的な学習内容、経験差への対応について、現状を述べた。続いて、平成28年11月に実施した学生へのアンケートの結果を分析し、経験者よりも初心者において集団指導の効果が顕著であったことを報告した。今後の課題として、さらなる経験差への対応と、他科目との連携を挙げ、初心者への入学前教育の実施、経験者向け特別クラスの設置、「音楽演習（器楽）」「初等音楽科指導法」「保育内容演習（表現）」「教育実習（幼）事前事後指導・実習」などの科目との連携など、平成29年度に向けての具体的な提案を行っている。

1. はじめに

本稿は、平成28年4月にスタートした本学初等教育学科の「音楽」の授業におけるピアノ指導の現状を把握・分析し、今後の課題とその対応について明らかにしようとするものである。

本学では、平成27年度3月まで、文学部の「小学校教諭」「幼稚園教諭」「保育士」を目指す学生を対象に、ピアノ実技を指導する科目として「音楽Ⅰ（器楽Ⅰ）」（1年次前期必修*）と「音楽Ⅲ（基礎技能）」（1年次後期必修*）が用意され、複数の非常勤講師によるピアノ個人指導が行われてきた。さらに、これらの科目に求められる技能が不十分であった学生には、「音楽Ⅱ（器楽Ⅱ）」（1～4年次選択）の個人指導でフォローするなど、ピアノ実技を特色とする養成を行ってきた。

一方、平成28年度に発足した初等教育学科においては、ピアノ実技のみを指導する科目は用意されなかった。現在、ピアノ実技は、幼稚園・小学校における音楽活動全般を扱う「音楽」（1年次半期必修）の授業の中で集団指導を行い、希望する学生に対して、「音楽演習（器楽）」（1～4年次選択）の個人指導でフォローすることになっている。

こうした学科カリキュラムの中での科目構成の変更は、新学部・学科の再編における教員・保育士の養成方針の見直しによるものである。

しかしながら、筆者が行なった実習巡回先や音楽研修会での聞き取り調査では、現場における教員の「ピアノ技能」の需要は非常に高いという印象であった。ある教諭は、「クラスの先生のピアノが上手だと、音楽活動のみならず、精神活動も豊かになる。子どもたちはいきいきと歌い、クラスに一体感が生まれる。また、行事においても、ピアノが良いと行事がまとまり、そこに感動が生まれる。」と話された。こうした現場のニーズと

*保育士においては選択必修

の関係も踏まえ、ピアノ指導の内容については、その取扱いの軽重、限られた設定科目での指導法など、数多くの検討すべき課題がある。小学校学習指導要領の教科の目標にある「音楽を愛好する心情」を育てるために必要な教員のピアノ技能とはどのようなものなのか。また、「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」の「表現」にある「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう」ためには、教員のどのようなピアノ技能が必要なのか。養成校に求められるピアノ指導について考えるとともに、現状を踏まえて、今後の方向性を明確にしたい。

2. 平成28年度音楽授業におけるピアノ指導の概要

2-1 学習環境・方法

ピアノ指導は、小学校、幼稚園の音楽活動全般を扱う「音楽」の授業の中で、毎回約45分を使って行った。残りの45分は、歌唱・楽器・動きの活動などを行った。

平成28年度初等教育学科の学生は、77名（児童教育コース25名、幼児教育コース52名）である。児童教育コースの学生25名は、全員が後期に1クラスとして「音楽」の授業を履修。幼児教育コースの学生52名は、17名（前期）、18名（前期）、17名（後期）の3クラスに分かれて履修した。

授業は、キーボード13台とピアノ1台を備えた専用室と、キーボード10台とピアノ1台を備えた専用室にて実施。基本となる集団指導では、1台のキーボードに2人が並んで座って演奏、必要に応じて取り入れた個人指導では、1人1台のキーボードを使用した。

集団指導では、歌唱を通して曲に慣れた後、「音名唱→リズム打ち→メロディの演奏→コード伴奏→弾き歌い」というように、次第に難易度を高めながら曲を完成し、レパートリーを増やしていった。1台のキーボードに初心者と経験者がペアで座るようにし、初心者には、わからないことは積極的に経験者に尋ねるよう、また、経験者には、遠慮せずに初心者に適切な助言をするよう促した。5回目・10回目・15回目の授業では、「弾き歌い」の小テストを行い、個人の履修状況を把握し、評価した。

2-2 学習内容

1) 課題曲

学習にあたっては、まず、コードの種類が少ない11種類の曲を用いて、右手のメロディと共に、左手の様々なコード伴奏パターンを習得させた。

その後、児童教育コースの学生には、「小学校1・2年生の共通歌唱教材」全8曲の弾き歌いを課した。また、幼児教育コースの学生には、「生活のうた」と「季節のうた」の弾き歌い、計8曲を課した。どちらも初心者にとっては、難易度が高いと思われたが、「コードによる伴奏」と「指使いの指定」によって、最終的には、85%の学生が、流れを止めずに「弾き歌い」することができた。

また、コード伴奏以外に、「ペンタトニック」「全音音階」「グリッサンド」「クラスター」を用いた即興演奏を指導した。これらの即興演奏は、子どもたちの身体表現や劇遊びの効果音などへの応用が期待できるもので、指導には、「図形楽譜」を用いた。そして、学んだ奏法を用いて、身体表現を伴う小さな物語を創作・実演することを最終的な目標とした。

以下は、児童教育コース・幼児教育コースの「共通課題」と、それぞれの「コース別課題」を示した一覧表である。

	伴奏コード・他	曲 目
児童教育コース・幼児教育コース共通課題	Cコード	かえるのうた
	C・Gコード	ぶんぶんぶん、ちょうちょう、メリーさんのひつじ、こぶたぬきつねこ、ロンドンばしがおちる、10人のインディアン、あたまかたひざポン、アビニョンの橋で、山の音楽家
	C・G・Fコード	てをたたきましょう
	ペンタトニック 全音音階 グリッサンド クラスター	・子どもたちの動きを支えるピアノの効果音に慣れる。 「てんとうむしのマリちゃん、空を飛ぶ」(川口作) ・効果音を用い、「身体表現が楽しめる物語」を創作する。
児童教育コース課題	C・G・Fコード	春がきた(小学校第2学年, 歌唱共通教材) かたつむり(小学校第1学年, 歌唱共通教材) 虫のこえ(小学校第2学年, 歌唱共通教材) 夕やけこやけ(小学校第2学年, 歌唱共通教材) 日のまる(小学校第1学年, 歌唱共通教材)
	G・C・D7	うみ(小学校第1学年, 歌唱共通教材)
	オスティナート伴奏	ひらいたひらいた(小学校第1学年, 歌唱共通教材) かくれんぼ(小学校第2学年, 歌唱共通教材)
幼児教育コース課題	C・G・Fコード	おはよう おべんとう おかえりのうた さようならのうた (以上, 1年を通して歌われるうた) とんぼのめがね(夏・秋のうた) どんぐりころころ(秋のうた) やきいもグーチーパー(秋・冬のうた) ゆき(冬のうた)

上記の課題曲以外に、経験者が各々取り組んだ自由曲は、以下の通りである。

お正月、こいのぼり、こぎつね、コンコンクシャンのうた、勇気100%、さんば、あの青い空のように、世界中の子どもたちが、おもちゃのチャチャチャ、大きな古時計、あわてんぼうのサンタクロース、クリスマスの歌がきこえてくるよ、大切なもの、星に願いを、翼をください、涙そうそう、BELIEVE、はばたこう明日へ

2) 「弾き歌い」とその周辺

授業を通して弾けるようになった曲は、身体表現・楽器活動・劇あそびなどの活動と結び付けて活用できるよう、活動事例を紹介し、実践した。

「アビニョンの橋で」では、上記表のとおりC・Gコードのピアノ弾き歌いに加えて、鈴やマラカスなどの小さな楽器を併用し、劇中の登場人物(動物など)に見立てて、音当て・音探し・表現あそびを行う活動事例を紹介した。「てんとうむしのマリちゃん、空を飛ぶ」では、前述のピアノ即興と共に、お話の創作を行った。

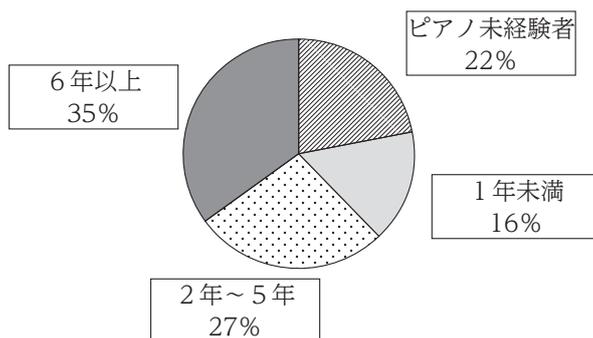
こういった実践は、ピアノ未経験者・経験者の格差を埋めている。

2-3 「経験差」への対応

1) 個人カルテの活用

養成校のピアノ指導でいつも問題になるのは「個人差」である。全くピアノを学んだことのない学生から、音楽大学を目指してきた学生まで、個人差は大きい。1回目の授業で行った「ピアノ経験年数」を尋ねるアンケート調査の結果は以下のとおりであった。

平成28年度 初等教育学科 授業開始時ピアノ経験年数



学生の能力や受けた指導の質によって、経験年数と習熟度が比例するとはかぎらないが、クラス内で個人差があることは、明らかであった。そこで、個人差に対応するため、授業クラスを上記の経験年数を参考に、「初めて学ぶ者」、「今までに1年～5年の経験がある」「今までに6年以上の経験がある」の3グループに分け、「赤色」「黄緑色」「緑色」の個人カルテを用意した。

カルテ表紙には名前を書き、カルテ内部には、①「入学までの音楽経験・ピアノ経験年数・練習用鍵盤楽器の有無・好きな音楽」などのアセスメント事項、②授業で取り組んでいる曲の学習状況記入用紙、③ピアノ学習に困っている学生が、練習に集まる日程表、④試験曲の自己評価表と試験結果の用紙、を綴じた。

授業中、カルテは各自のキーボード上に置かせた。そして、必要に応じてカルテ内の用紙に記入させ、毎回、授業後に回収した。色分けされたカルテは、学生状況把握を容易にした。また、学生にとっても初心者経験者に尋ねたり、経験者が初心者に声をかけたりする際の目印となった。また、学習期間の途中において、別の習熟度別グループへの移動が相応しいと判断された学生は、すぐにカルテの色を変え、適切な習熟度別グループへ移動させた。

2) 習熟度に応じた奏法での合奏

全員で同時に弾き歌いする場合は、(A)右手のメロディのみ、(B)左手のみ、(C)両手、(D)片手の弾き歌い、(E)両手の弾き歌い、(F)両手暗譜の弾き歌い、というように、同時に異なった弾き方で合奏するようにした。どの弾き方を選ぶかは個人に任せ、「練習したい弾き方」あるいは、「挑戦したい弾き方」を自由に行わせた。この方法であれば、メロディラインを片手で弾くのがやっとの学生も、十分に弾き歌いができる学生と一緒に問題なく演奏することができる。この方法は、学生自らが自分の課題を見つけ、主体的に学習に取り組むトレーニングともなった。

3) 初心者と経験者が共に学ぶために

集団指導においては、初心者と経験者が共に学ぶことの意味を強調することを心掛けた。経験差については、「経験の量が違うのだから、技術に違いがあるのは当然。同じ道を目指す仲間なのだから、協力しあって学んでいこう」と呼びかけた。また、「初心者は、よく弾ける人から、視覚的な情報をたくさんもらいながら弾こう。」「経験者は、手の形や指使い、リズムなど、初心者のお手本になるように弾こう。」「人に伝えることは、将来、子どもたちに何かを伝えることと同じこと。わかりやすく、相手がいやな思いをしないように伝えよう。」というように、初心者と経験者が、ただ一緒に弾いているのではなく、そこに相互作用が期待されていることを具体的に伝えるようにした。

また、同時に演奏することの利点も具体的に伝えた。例えば、「人のテンポに合わせることは、子どもが歌うテンポに寄り添うのと同じこと。子どもの速さよりどんどん速く弾いてしまったり、遅すぎたり、止まったりせずに、子どもたちの音楽活動が支えられるように弾こう。」と、他者に合わせることを意味を伝えた。歌唱の際には、「子どもたちに、歌うことは気持ちいいことだと伝わるよう、みんなで楽しんで歌えるときにこそ、しっかり声を出そう。」と声をかけた。

3. 学生の意識調査

3-1 調査内容と方法

期 間：平成28年11月10日～平成28年11月18日

対象者：初等教育学科1年生全員

設 問：「ピアノの集団学習について、あなたが感じる『良い点』と『良くない点』の両方を教えてください。」

方 法：記名式で行い、批判的な意見や本音が書きやすいように、「良い点」「良くない点」の両方の回答欄を設けた。

3-2 結果

ピアノの集団学習について「良い点」として挙げられた回答は、下記の通りであった。丸括弧内は、回答した学生が経験年数1年未満の初心者か、それ以上の経験者かを示している。

<技術習得に関して>

- わからないところを身近にいる友だちに聞くとすぐに解決できる。(初心者)
- 上手な人がたくさんいるから周りを見てお手本にできる。(初心者)
- 実際に弾いてもらってイメージをつかむことができる。(初心者)
- 友だちだとアドバイスをもらったり、質問をしたりしやすい。(初心者)
- 弾ける人にコツが教えてもらえる。(初心者)

<モチベーションに関して>

- 遅れていると感じている分、なおさらがんばることができる。(初心者)
- 経験者をみて未経験者もやる気を出せる。(初心者)
- 自分よりピアノが上手い人を見習って、自分もすごく刺激される。(初心者)
- 自分のできなさが分かって、頑張ろうと思えるところ。(初心者)

<その他の回答>

- 互いに教え合うことで仲間意識が生まれる。(経験者)
- 教える経験が新鮮。(経験者)

初心者が、経験者との集団学習に対して一定の学習効果を感じている様子が読みとれる。それに対して、経験者側からの記述がほとんど見当たらなかった。経験者は、初心者との集団学習だけでは、満足することができなかつたのではないかと考えられる。

上記に対して、「良くない点」の回答は、以下の通りであった。

<心理面に関して>

- 自分のできなさすぎて悲しくなってくる。(初心者)
- できない自分を見られるのがはずかしい。(初心者)
- 劣等感が芽生える。(初心者)
- あせってしまう。(初心者)

<進度に関して>

- ペースが早い。(初心者)
- 置いていかれるような気がする。(初心者)
- すぐに弾けるようになってしまって時間ももったいなく感じる。(経験者)

<経験差について>

- 上手な人は退屈そう。(初心者)

- 簡単すぎて自分のためにあまりならない。(経験者)
 - 一つの教室の中で差が開いていて少しだけ気になる。(経験者)
- <初心者に教えることに関して>
- 教える側に回ってしまうと、自分も弾きたいのにあまり弾けなくなってしまう。(経験者)

集団学習を「良い点」において前向きに評価しながらも、同時に、技術の差に心を痛めている初心者が複数みられた。一方、経験者は、集団学習において、「課題がやさしすぎる」と感じるが多かったようである。

4. 考察

4-1 集団指導の効果

1) 初心者と経験者の関わり

アンケート結果から、現在の集団指導の効果は、初心者においてより顕著であったと考えられる。新しい課題に取り組む初心者は、しばしば「いちど弾いてほしい。」と実演を希望する。指が速く動くのか、ゆっくり動くのか、あるいは、指先を大きく広げるのか、閉じたまま弾けるのかなど、実演から視覚的に得られる情報は多い。授業では、初心者と経験者が隣り合って座るよう配置した。そうして得られた「視覚的な情報」と「聴覚的な情報」は、初心者が、メロディ・リズム・響き・指使い・テンポといった音楽的要素や技術的要素を直感的に把握することを可能にした。また、経験者が初心者に指導することは、人に寄り添い、わかりやすく伝えることの経験になった。

2) 「全員で一緒に弾く」ことによる学習効果

集団指導では、最大25名が同時に演奏した。全員で一緒に弾く場合、個人が途中で止まってしまっても、止まった学生のみやり直しをさせるといった対応は、ほとんどしなかった。それは、現場において、「完璧なミスのない演奏」よりも、「子どもが歌ったり演奏したりする活動の流れを止めず、支える演奏」が求められるためである。

また、学生たちは、1人で練習を続けているうちに、いつのまにか子どもたちが歌えないほどの速いテンポで弾いていたり、あるいは、遅すぎるテンポで弾いていたりすることがある。集団指導では、そういった間違っただテンポの設定を自然に回避することができた。つまり、「全員で一緒に弾く」ことは、子どもたちの歌に合わせて弾くためのトレーニングになった。

3) 「一緒に」という安心感

初心者の「弾くこと」「歌うこと」についての難しさや間違いは、同じパターンのもが多く、集団に対して指導した方が効率がよいと考える。全員で弾き歌いする場合、間違い等の指摘は、個人に対してはほとんどせず、できるかぎり全員に対して行うようにした。この「一緒に」弾いたり、歌ったりすることには、緊張を和らげる効果もあると考えられる。アンケートでは、「弾き歌いするときを感じる難しさ」として、「人前での緊張」を挙げる者が多かった。「みんなで弾く」「みんなで歌う」は、「うまくいなくても目立たない」安心感がある。

4-2 経験差に対する配慮

アンケート結果からも、初心者と経験者が一緒に学ぶことの意味を具体的に伝えていくことが必要であると感じた。意味を丁寧に伝えることで、学生たちは、集団指導を意義あるものとして捉え、積極的に協力しあい、学びあう雰囲気を保つことができるのであろう。いずれの立場の学生にも将来指導者の立場に立つ者として、繰り返し前向きな言葉をかけ、励ますことが大切である。

授業を進めるにあたり、経験者が初心者に弾き方を指導することは、経験者にとって興味深い体験になると

考えたが、期待したほどではなかった。経験者は、初心者への指導に一定の理解を示しながらも、自分自身のさらなるピアノ技術の向上と、全般的な音楽指導法の習得等を求めており、今後、そのことに対する配慮が必要である。

5. 今後の課題と対応

5-1 初心者への入学前教育の実施

今後の課題として、まず、初心者に対するピアノ指導期間の短さの改善があげられる。15回の授業の中だけで現場に使える弾き歌いの技術を習得するのは、未経験者にとってはかなり難しい。今後、クラス授業をスムーズに進めるためには、入学前のフォローが不可欠になるであろう。授業の初めの数時間で学習する課題(10曲)は、誰もが知っている子どもの歌に2種類のコード伴奏を付けるというものである。ポイントさえ押さえて練習すれば、初心者でも自習できる範囲の内容だといえよう。この部分について入学が決まった学生に楽譜集を配布し、初心者対象のピアノ講座を開いて指導し、入学式までの課題とすれば、随分授業の効率化を図ることができると思う。

5-2 「経験者向け特別クラス」の設置

2つ目の課題は、よく弾ける学生への対応である。ピアノ技能のある経験者に、弾くことが初めての学生と同じ場で同じ指導を受けさせることは、不適切であろう。平成28年度の授業設定においては、初心者との関わりに意味を持たせたり、経験者用の課題を提供したりしてきたが、やはり、一斉授業では限界を感じた。

今後の対応としては、入学式後のオリエンテーションの中で「ピアノ経験についてのアンケート調査」を行い、「音楽」の授業において既にピアノ技能を持っている学生を集めた「ピアノ経験者向け特別クラス」を設けたい。それによって、初心者と足並みを揃えさせることなく、楽器活動・歌唱活動・身体表現などの習得に直行させられ、ひいては「音楽に強い教員」の育成が可能となる。

5-3 「音楽演習(器楽)」との連携

3つ目の課題は、1年次の「音楽」の15回の授業だけでは、現場に使える「弾き歌い」の技術を習得することができなかった学生への対応である。「弾き歌い」の技術の習得速度については個人差があり、半期の学習期間で目標に到達できない一部の学生があるのは、当然のことと思われる。そういった「ピアノ学習」の特性を考えると、1年次から選択科目として用意されている「音楽演習(器楽)」を有効に活用し、フォローする体制を今後検討する必要がある。

5-4 他科目、インフォメディアセンターとの連携

弾けるようになったレパートリーは、その後も様々な授業の中で演奏し、より実践的な学びを深めていくことができれば理想的である。今後は、「初等音楽科指導法」(児童教育コース2年次必修)・「教育実習(幼)事前事後指導・実習」(幼児教育コース2年次必修)・保育内容演習(表現)(幼児教育コース3年次必修)など、他の科目の教員とも連携を図っていきたいと考えている。

その他、初心者に対しては、「演奏動画」「読譜アプリ」などの活用も検討している。学内メディアセンターとも連携をとりながら、安全な方法でそういった資料の提供ができれば、自主学習の助けになるであろう。

6. おわりに

本稿では、平成28年度初等教育学科「音楽」における「ピアノ指導」の現状を把握し、学生アンケート結果を踏まえて、今後の課題と対応を明らかにすることを試みた。

将来、子どもたちの音楽的な自己表現を支える役割を担う学部生に対して、在学期間中15回だけのピアノ指

導は、圧倒的に少なすぎる、というのが、4月当初の率直な感想であった。本稿を通じて、これ以上授業時間を増やさない場合の、ある程度の改善策が、いくつか提案できたと考えている。

改善策の一つに「経験者向け特別クラス」の設置を挙げたが、全ての学生を「習熟度別」に分けることは得策ではないと考えている。なぜなら、多少のピアノ学習経験のある学生の演奏が、初心者に対して大きな役割を果たしているからである。また、授業を通して育まれる「互いの経験差を受け入れ、横のつながりの中で助け合う姿勢」は、現場の教師の「人間力」につながるものでもあると確信している。

養成校の学生に必要なピアノ指導とは、どんどん高度な技術を習得させていく、という性格のものではない。弾き歌いを、「子どもの表現を支えるもの」として捉え、4年間の学生生活の中で他分野の学習時間とのバランスをとりながら、効率的にレパートリーを増やしていくことが必要だ。さらに、弾けるようになった曲を用いて、どのように音楽活動を展開していくか、どのように子どもたちの生活と結び付けていくのかということまでを、じっくりと考えさせる授業内容を展開していきたい。

課題は多いが、初等教育学科開設2年目を前に、早急に対応していく必要性を感じている。

参考文献・参考楽譜

- ・保育士および幼稚園・小学校教員養成課程におけるピアノ指導に関する考察—学生の実態調査を踏まえて— 桐岡亜由美, 寺田陽子, 森本麻衣子, 難波正明 京都女子大学発達教育学部紀要第10号 (2014)
- ・保育者及び教員養成系大学の学生に対するピアノを用いた指導法—小学校音楽科歌唱教材の簡易伴奏譜活用のあり方— 田中宏明 高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習—23 (2016)
- ・子どもの表現のためのピアノ伴奏法Ⅰ—初級者を対象としたピアノ伴奏力育成について— 田原昌子 プール学院大学研究紀要 第55号 (2014)
- ・子どもの表現のためのピアノ伴奏法Ⅱ—初級者を対象としたピアノ伴奏力育成について— 田原昌子 プール学院大学研究紀要 第56号 (2015)
- ・保育者養成校のピアノ初心者に対する指導について—ピアノ特補の試み— 小松洋子 聖徳大学幼児教育専門学校研究紀要 第5号 (2013)
- ・入学前課題と保育者養成に関する研究～ピアノ教材の提示～ 溝口綾子 帝京短期大学紀要 (2016)
- ・保育者養成校におけるピアノ指導法の一考察—演奏技術向上の観点から見た入学前ピアノレッスンの効果について 川畑尚子 大阪キリスト教短期大学紀要 第55集 (2015)
- ・音と動きの研究43 日本オルフ音楽教育研究会 (2015)
- ・かんたんメソッド コードで弾き歌い 細田淳子, 笹井邦彦, 西海聡子, 悠木昭宏共著 (2011)
- ・3つのコードで楽しく弾けるピアノ伴奏曲集 伊藤伸明編著 ドレミ出版 (2016)
- ・小学校学習指導要領 第4版〈平成20年3月告示〉文部科学省 東京書籍
- ・幼稚園教育要領・保育所保育指針 原本〈平成20年告示〉文部科学省・厚生労働省 チャイルド本社
- ・幼保連携型認定こども園教育・保育要領〈平成26年告示〉フレーベル館

【英文要旨】

This research is to overview and analyze the current situations of piano instructions in the subject of “Music,” which is for students in Early Childhood Education Major, that launched this academic year of 2016. Overlooking the class situations, surveys for students were undertaken, and the various levels of students’ piano skills came up as the issues for improvements. Strategies, such as extracting the outstandingly skilled in piano and deliberately unclassifying students with some gaps, are proposed to correspond to them.